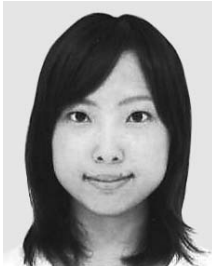


思い描く産業動物臨床獣医師像

林 亜樹 (山口大学農学部獣医学科6年生)



「飼料が高くてね、出費のほうが多いよ」、「周りは次々とやめていくよ」臨床実習や研究室による検診で農家を訪れると、こんな声を次々と耳にする。農家の高年齢化、飼料の高騰、牛乳の生産調整、そして人口の減少と、ここ数年、

畜産農家にとって厳しい時代が続いている。

そんな世界とも知らず、産業動物臨床獣医師を志し獣医学科に入学して6年目になる。父親の仕事の都合で小学生時代を過ごしたアメリカは自然が広大で、馬や牛が身近な存在であった。友人の家で馬に乗ったり、夏休みは牧場でキャンプをしたり、また、家があった団地の裏は牛の放牧場で、日々鳴き声が聞こえてきたものであった。日本の工業地帯で生まれ育った私は開眼したように、そんな環境の中で大動物と接することに夢中になっていった。「将来は牧場で働く人になりたい。獣医師なら何か役に立てるかもしれない。」と思うようになったのも、自然なことだったのかもしれない。

ただ大動物が好きで、獣医師を志したが、入った世界はそう甘いものではなかった。よく「産業動物の臨床は小動物よりも適当で簡単」といった認識がされるが、そのようなことはない。たしかに牛や豚を対象にCTやMRIを用いることは滅多にないし、つきっきりで世話をするということがほとんどない。というのも、産業動物臨床の本質が「農家が利益をあげること」であるからだと思う。たとえ病気を治療して生命を維持できたとしても、生産能力を維持できなければ、産業動物獣医療では改善とは言えない。それを失った時点で的確な淘汰の判断をしなければ農家は不利益を被る。生産能力を中心に改良され飼養されている、言い換えれば、生理的に異常を発生しやすい家畜の健康を維持し、ロスを少なくして農家が最大限の利益をあげられるようにすることが産



野外実習風景 (右から3人目が著者)

業動物獣医師の役割であると、今の私は認識している。要するに、小動物臨床とは全く異なる分野である。

ところが、本質である「農家が利益をあげること」自体が、昨今そう簡単にはいなくなってしまっている。畜産物需要は減り続ける上、飼養管理での支出が増え、更に生産調整ともなれば収入自体も減るのだから、ロスを最低限に抑えなければ経営の維持は困難となる。1年前にわずか1年の在任期間で福田康夫元首相が辞任した際に、インタビューで「辞められるならば私も今すぐ辞めたいよ。」と答える酪農家の声はもっともなものであった。傾きかけている日本の農家を支え、引き起こすことが必要になっているのだから、現在、獣医師には単に人工授精や治療だけにとどまらず、これまで以上の能力が求められているはずである。伝統や経験に頼るばかりでなく、科学的根拠に基づく獣医療が大きな基盤となる必要があると感じている。現場の獣医師は「サイエンティスト」ではないかもしれないが、「スペシャリスト」といえるであろう。世界のサイエンティストや他のスペシャリスト達が発信する情報に耳をすませ、診断・治療に取り入れ、進化を続けていくことが義務なのではないだろうか。この点は小動物臨床と同様である。

† 連絡責任者 (担当教官): 中尾敏彦 (山口大学農学部獣医学科獣医臨床繁殖学教室)

〒753-8515 山口市吉田1677-1

☎083-933-5800 FAX 083-933-5820

E-mail: tnakao@yamaguchi-u.ac.jp

また、農家の経営や飼養管理に対する指導をすることも、多くの農家が求めている獣医師の役割であると感じている。特に乳牛では近年、栄養状態と疾病や繁殖成績との関連が多く報告されている。ところが、「ではどうしたらよいのか」という部分は未だ曖昧で、更に個々の農家ごとに管理方法やその問題点の特徴は異なる。乳量が出ないのか、繁殖成績が悪いのか、はたまた蹄が悪いのか。悪循環に陥っている場合も多いだろう。農家には飼料会社の人も出入りするが、日々その現場を見ていて、疾病や繁殖の管理もできる臨床獣医師ならば、全てを包括的に指導することができるであろう。「問題は餌

かもしれませんね」で終わってしまう現場を何度か見たことがあるが、農家の方の表情は決して満足しているといえるものではなかった。

農家の方のつぶやきを聞いても、今は何も力になれないのがもどかしく、情けなく思う。できることといえば、このような考えを巡らせることしかない。「理論なき実践は盲目であり、実践なき理論は空虚である。」という言葉がある。大口をたたくようだが、目指すは実践と理論、どちらも豊富な、どちらにも偏らない産業動物臨床獣医師である。今のところ理論が先行しており、実践のスタートラインに立てる日が待ち遠しく思われる。